「に」げずに
「し」んじて
「かん」しゃして
「き」ょうりょくする

1月

2025年度
西神吉小だより

加古川市立西神吉小学校
学校通信
No.140

～ 命のバトンをつなぐ ～

兵庫県に住む私たちにとって、１月１７日という日は忘れられない日であり、忘れてはいけない日でもあります。阪神淡路大震災があった日です。１９９５年の発生から３１年という月日が流れました。現在の子どもたちはもちろん、若い世代の教職員にとっても、震災は「歴史上の出来事」になりつつあります。しかし、あの日失われた多くの命と、そこから学んだ教訓を風化させてはなりません。

本校でも、この日に合わせて「防災学習」や「避難訓練」を実施しました。避難訓練では、前回以上に真剣に取り組む子どもたちの姿がありました。講評として、私から次のように話しました。

避難訓練で話したこと

みなさん、今日の避難訓練はどうでしたか？「お・は・し・も」を守って、真剣に取り組めましたか？

今から３１年前、1995 年１月 17 日の朝５時４６分、まだみなさんのような子どもたちが布団の中で眠っている時間に、とても大きな地震が起きました。それが「阪神淡路大震災」です。

亡くなった方は６千人を超え、怪我をした人は４万３千人、そして１０万を超える建物が壊れました。大きな地震によって、一瞬にして家が壊れ、火事が起き、たくさんの大切な命が失われたのです。今のみなさんのように、学校へ行くのを楽しみにしていた小学生も犠牲になりました。

この大きな悲しみの中で、私たちは大切なことを学びました。

一つ目は、「自分の命は自分で守る」ということです。 地震が起きたとき、先生やお家の人を待つ暇はありません。机の下に潜る、頭を守る、倒れてくるものから離れる。今日練習した動きが、一瞬の判断でみなさんの命を救います。

二つ目は、「助け合う」ということです。震災のとき、倒れた家の下から近所の人たちが声を掛け合い、力を合わせて助け出しました。避難所では、小学生もバケツで水を運んだり、小さい子の面倒を見たりして活躍しました。

震災を経験した人たちは、口を揃えてこう言います。

「生きていてよかった」「当たり前の毎日は、実はとても幸せなことなんだ」と。

みなさんが今、こうして友だちと笑い、勉強できていることは、とても尊いことです。今日、みなさんが真剣に訓練に取り組んだのは、「自分の命」と「隣にいる友だちの命」を大切にしたいからです。

地震はいつ、どこで起こるかは分かりません。でも、今日のような訓練を一生懸命行い、備えをしておけば、私たちはその怖さに立ち向かうことができます。

今日おうちに帰ったら、「地震が来たらどこに隠れる？」「どこで待ち合わせる？」と、家族で話し合ってみてください。そして、家具の固定や水、食料、懐中電灯などの非常持ち出し品の準備など、できる範囲で、少しでも地震への備えをしてください。みなさんの大切な命を、これからもずっと守り続けていきましょう。

それでは、被災により亡くなられた方々に１分間の黙祷を捧げます。

校長先生が「黙祷」と言ったら、目を閉じて頭を下げましょう。

「黙祷」（１分間の黙祷、想いをこめて、静かにできました）

これで校長先生のお話を終わります。

【給食は防災カレー】

震災を知らない子どもたちに、当時の様子や人々の絆、そして命の尊さを伝えても、「知識」であって「体験」にはなりません。だからこそ、震災から学んだ教訓を、大切な命というバトンを、しっかり未来へとつないでいくことが大切です。災害時に自分の命を守れるようになること、そして、いつか誰かの助けになれる大人へと成長すること。その歩みこそが、震災の記憶を風化させない方法だと思います。

ぜひ、ご家庭でも「命のバトン」について話してみませんか。震災を知る世代から知らない世代へ、言葉で伝えていくことも立派な「バトン」の受け渡しです。「あの日、どこにいて、何をしていたか」「命を守るために、我が家では何を一番大切にするか」など、難しい話でなくて構いません。食卓での何気ない会話が、子どもたちの心に「命の重み」を刻む大切な機会になると思います。